

合掌

**「働く」とは、「傍(はた)を楽(らく)にする」こと**

「空海・“折れない心”をつくる言葉」(池口恵観著 三笠書房)という本に、「働くことには、自分が体を動かすことによって、“傍(はた)を楽(らく)にさせる”“傍(かたわ)らににいる人を楽しくさせる”という意味もある、と私は考えています。」ということが書かれてありました。なるほど上手いことを言うものだと思います。

将来の何になりたいですかという質問に、今の子ども達や青年達は何と答えるのか、統計資料でどのように出ているか詳しくは知りませんが、子どもであれば、スポーツ選手というのが多いのでしょうか。最近では、ベトナム関係や飲食関係の職業もよく耳にします。また、青年達はどのような職業を希望しているか。子どもに比べれば、もっと現実的で具体的なものには違いありませんが、その選択の理由は、自分の興味のあること、得意なこと、または会社の特質や給料が希望に沿うものなどを希望することが多いのではないのでしょうか。しかし、この不景気の中で、なかなかそうした希望の職に就けることは難しいというのが現実でしょう。

前出の本では、働くということについて、さらに次のように続けます。「自分や家族だけでなく、傍らにいても支え合って、楽しい暮らしを共有していく。それが、働くということの本源の意味であることに、気付かなければいけないのではないのでしょうか。」と。

自分が働くことで、自分の家族が生活でき、楽しく生きることができる、そういうことに気づき、そういう自分の“働く”ということに自信を持つことができること、そして、一緒に暮らす者同士が、互いに支え合い、励まし合って生きることによって喜びを感じることができること、それが大切なのだということです。

NHKの朝の連続テレビ小説御存じですね。私も「ゲゲゲの女房」以来、欠かさず観ていますが、なぜ自分がこれほど、このシリーズにハマっているか考えてみると、どの物語も、家族が、家族の一員たちが、それぞれの仕事や役割を自覚し、そこで懸命に努力し、互いに励まし合い、助け合って生きる姿が描かれているからだと思うのです。楽しい時も苦しい時も、共に生きている、そして、その“時”を共有し共感し合い、そこに“幸せ”を感じているのです。

また、仕事というのは、いろいろな形で社会を支え、構成しているものです。無駄なものはありません。自分が働いたことが、何らかの形で社会の役に立っているのです。物を作る人、解体する人、売る人、買う人、運ぶ人、事務系、研究開発、その他諸々。どれも社会にとっては不可欠なものです。そういう社会の一役を担っているということに、喜びを感じられること、これもまた、大切なことなのだと思います。

こういう感覚を持つこと、これが“自他共楽”の第一歩です。道院でもよく話をします。私たち少林寺拳法が目指す理想境とは、あの世にあるという極楽浄土や、絵に描いた餅などではなく、私たちが住んでいるこの世にこそ作るものであり、また、社会や世の中を大胆に変革するということでもなく、まずは自分たちの身近から作っていくものであると。それは、家族であったり、職場であったり、学校であったり……。つまり、自分の関わる集団の中から、互いが協力し合い、助け合い、励まし合い、慈しみあう関係を作っていくことから始まるのです。

自分の営みが、誰かの役に立っていることを自覚すること、自覚して自信を持って働き、生きること、これが一つの“自己確立”ということであり、そして、関わりあう人たちと、人生の様々なことを共感しあえる関係を築いていくこと、これが、“自他共楽”ということなのだろうと、“働く”ことは“傍(はた)を楽(らく)にする”ことという言葉に出逢えて、そんなことを思いました。

本当に少林寺拳法の教えは、いたるところに転がっています。いや、少林寺拳法の教えとは人生の在り方そのものだという事です。人生の様々な場面でそれに気づくこと、これが、“八方目”であり、常に自分の在り方を見つめて生きるという“脚下照顧”ということです。

結手